

主 題：不品行を除きなさい

聖書箇所：コリント人への手紙第一 5章1-13節

きょうはコリント人への手紙第一5章を最後まで学びたいと思います。

コリント教会の問題、彼らの罪は彼らのプライドでした。罪の恐ろしいところは、その罪を赦してしまうならば、その罪が別の罪を生み出していくことです。パウロはこの教会にある罪を犯している者たちを戒めるだけではなく、教会の中に罪が入り込んで来たら、教会としてどのように対応すべきなのか、そのことについて神が何を教えてくださっているのかをパウロは教えます。

A. 罪への誤った対応 1-2節

1. 「存在した罪」：「不品行」 1節 レビ18：8

まず1節に、コリントの教会にどのような罪が存在していたのかを見ることができます。「あなたがたの間に不品行があるということが言われています。」とあります。この「不品行」ということばは「行いが悪い」という意味がありますが、このことばは“ポーネイヤ”というギリシャ語です。そしてこのことばから派生したことばが“ポルノ”です。ですから性的な不品行の罪という意味で使われます。実際どういう「不品行」がこの教会の中で行われていたのかがその後が続いて書かれています。「しかもそれは、異邦人の中にもないほどの不品行で、父の妻を妻にしている者がいるとのことです。」と。「父の妻」と記したのは、この女性がその罪を犯している息子の実の母ではなかったからです。自分の父親が妻としている女性、恐らくこの人物の母親は既に亡くなっていたのか、両親は離婚していたのか、その詳細は記されていませんけれども、恐らくこの父親は再婚したのでしょう。つまりこの息子は、義理の母親を自分の妻としているということです。周りから見たらそんなふうに見えるということです。しかもこの「している」という動詞が現在形で使われていますから、そのような関係が継続していたのです。まさにこれはみことばの教えに反することは言うまでもありません。確かにレビ記の中にはこういう罪に関して、それが神の前に正しくないことが18：8に「あなたの父の妻を犯してはならない。それは、あなたの父をはずかしめることである。」と記されています。ですからみことばもはっきりと罪だと言うことを、悲しいことにこの教会の中の、単数で書かれていますから恐らくひとりの兄弟が犯していたということです。

2. 「放置した罪」 2節

彼らの問題はそれだけではなかったのです。教会としてこの罪を放置し、この罪に対して何もしなかったということです。2節を見ると、「それなのに、あなたがたは誇り高ぶっています。そればかりか、そのような行ないをしている者をあなたがたの中から取り除こうとして悲しむこともなかったのです。」とあります。一番大きな問題は、そのような罪が明確にされているにもかかわらず、教会は何もしなかったということです。「あなたがたは誇り高ぶっています」と書かれています。こういった一連のことを通して彼らはうぬぼれていた。恐らくこの教会の多くの人たちは罪があることを確かに知ってはいても、人間的なさまざまな理屈をつけてこういった罪を正当化していた可能性があります。もっと言えば、そういう罪を犯している人を見て、みんな罪人だものね、我々もみんな罪を犯すものね、一体だれがその人に石を投げることができようかと。ですから自分たちがそういう罪に対して寛大であるとか、その人に対して寛容であるとか、恐らくそういうことを考えて、そのような自分たちを誇っていた可能性があります。ですから本来ならばみことばに沿って罪を正しく扱わなければいけないのにこういった人間的な考え方によって彼らは結果的に自分たちを誇るようなことをしていたのです。私たちが人間的な考えを選択してしまうならば、こういった危険性があります。

3. 「失った証し」

それだけではなく、「そのような行ないをしている者をあなたがたの中から取り除こうとして悲しむこともなかった」とあります。少なくとも罪を犯している人がいたら、もちろん自分のことも当然そうですが、罪に対して私たちは悲しむはずです。なぜなら罪は神を悲しませるからです。だから自分自身の歩みを見ている、なんて自分が罪深いのか、神の前に悲しむはずです。同時に愛する兄弟姉妹たちがもし罪を犯しているならば、それについても私たちは悲しむはずです。ところが残念ながらこの教会の人々はそのような罪を見ているにも悲しむことがなかったのです。「そのような行ないをしている者をあなたがたの中から取り除く」——教会戒規の話です。パウロはその話を5章の中でするのです。もし罪が神の栄光を汚すということがわかっていたならば、その罪が教会の中でなされていることを悲しむだけではなくて、その罪を取り除こうとするはずだと。それがなされていなかったのです。ですから先ほどもお話ししたように、聖書に立たずに人間的な考え方に私たちが立った時に、みことばに反する結論を引き出してしま

危険性があるのです。残念ながらこういうことをしていたゆえに、この教会は証しを失ったのです。

なぜわかるかという、1節に「あなたがたの間に不品行があるということが言われています。」とあります。彼らが自分たちでそう言っていたのではないのです。そういうふうに関りの人々が言っていたのです。あの教会はこういう罪を犯している、そういう人がいるのだということを関りの人たちが言っていたのです。教会というのは聖いキリストの証しをする場所です。私たちの神がどんなにすばらしいお方であるかを証しするのです。悲しいことにこの教会はそれをしていなかった。正しくない偽りのキリストを証しするようになっていたのです。

B. 罪への正しい対応 3-5節

1. 「戒規」 3節

そのことを知ったパウロは、罪に対してどう対応すべきなのかを3節から教えていきます。「私のほうでは、からだはそこにいなくても心はそこにおり、現にそこにいるのと同じように、そのような行ないをした者を主イエスの御名によってすでにさばきました。」とあります。この「さばき」というのは戒規の話です。そしてパウロはその戒規こそが不品行を行っている者に対する正しい対応であると教えるのです。

パウロは確かにからだにおいてはコリントにいませんでした。でもコリントの人々のことをいつも思っていたし、ですからこういう言い方をします。「からだはそこにいなくても心はそこにおり」、あなたたちのことを常に思っていると。そして、「さばき」をしましたと完了形で記しています。もし私がそこにいたら、いやいなくてももうその人を私はさばいていると。なぜならそれが神の前に正しい対応であって、それをしていないあなたたちは間違っているのだとパウロは教えます。

2. 「教会の責任」 4-5節

教会にはどういう責任があるのか、実は4-5節にそのことが記されていますのでお読みします。「あなたがたが集まったときに、私も、霊においてともにおり、私たちの主イエスの権能をもって、このような者をサタンに引き渡したのです。」、パウロが言いたいのは、教会というのは主のみことばに従う存在だということです。教会が神のみことばに従わなかったら、教会ではありません。神の目的のために私たちは選び出された、呼び出された者たちです。神のみこころを行うために神があなたを呼んでくださったのです。神のみこころを行うことによって神の栄光を現わすからです。そうして私たちは世の人々にこの神様のすばらしさを証しするのです。

ですから3、4、5節を見ていただくと、まず3節には「主イエスの御名によってすでにさば」いたとあります。パウロがさばいたというのは彼がその人に対して個人的な怒りを持っていてさばいたというわけではありません。「主イエスの御名によって」というのは、教会の中心はイエス様なのです。主が喜んでいただくことを教会は考えてそれを選択するのです。今お話ししたように主の栄光を現わそうとするなら主の命じられたことを行うことが必要です。ですからパウロは私はすでにその人をさばいた。なぜならそれは主のみことばに従うことになる。私たちがあがめたい、私たちがほめたたえたい、私たちが喜ばしい、主イエスご自身を喜ばせる選択だということを使うのです。

1) 主のみことばに従う 4節

また、第二版は「主イエスの権能」と記しています。新改訳2017は「御力」と訳しています。つまり主のみことばに従う時に、主の「御力」が示されるという話です。ですから教会としての使命は、神のみことばに従うことです。その時に神のみわざがなされるからです。この教会戒規についてはマタイ18章の中に詳しく記されています。その18節に「まことに、あなたがたに告げます。何でもあなたがたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたがたが地上で解くなら、それは天においても解かれているのです。」、主が何の話をなされたかという、地上で主のみこころをなすならば天もそれに同意するという話です。地上と教会と天が一致するという話です。もし私たちがこの地上にあって、教会としてみことばに沿って罪を悔い改めない人に戒規を施す時、天もそれに同意してくださるということです。また罪を悔い改めた人を教会が赦して代わりに回復させる時に、天もそのことに同意してくださるということです。だから我々の個人的な感情でもって物事を判断したり、選択するのではなくて、神のみことばに沿ってなす時にそこに力があるのです。なぜなら神ご自身がそれに同意してくださるからだと言うのです。教会はそういう使命を負っているのです。私たちの責任は神に対する責任です。この神様のみことばに従うという責任を私たちはいただいているのです。ですから教会としてそのようにしなさいと言うのです。

2) 悔い改めを命じる 5節

(1) 悔い改めない場合

パウロは5節で「このような者をサタンに引き渡した」と言います。この「引き渡す」というのはだれかを他の人の支配に引き渡すとか罰するために引き渡すという意味です。非常に厳しいことばに見取れます。それはその人がサタンに憑かれるという話をしていっているわけではありません。その人が罪を悔い改め

ないために、今までその人が楽しんでいた兄弟姉妹たちの交わりから断たれて、その人たちが望んでいるサタンの支配するこの世の中にその人たちを引き渡すということです。なぜならそのように神が悲しまれることを継続している人、神のみこころに反することを継続している人が何を望んでいるかという、世の中と同じことを望んでいるのでしょうか？自分の欲をどうやって満たすのか、自分をどう楽しませるのかを考えているのです。それは世が考えていることです。ですから何度その人に働きかけて罪を悔い改めなさいと命じても悔い改めないならば、これまで彼らが楽しんでいたその関係から断たれて、彼らが望んでいる関係に引き渡すという話です。

レオン・モリスという先生は「このことばには除名が含まれているように思える」と言っています。もし神の栄光を現わすことではなくて、神を喜ばせることではなくて、自分の思いどおりに歩いて行こうとするならばそういう人を除名しなさいと。

(2) その目的：

なぜそんなことをするのかという目的がこの後書いてあります。「それは彼の肉が滅ぼされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです。」とあります。「彼の肉」というのは恐らく彼の肉体の話です。神様の前を正しく歩むことをしないで、罪の中を歩み続けることによって、神様はその信仰者に対して、懲らしめをもたらします。I コリント 11 章の聖餐式の話の中で、私たちクリスチャンにとって必要なことは自分の生活を、自分の心を吟味することだと教えます。もし私たちが罪を持っていながら、あたかも自分は罪を犯していませんと偽っているならば、神は懲らしめをもたらすことを約束されています。I コリント 11:30 に「そのために、あなたがたの中に、弱い者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。」と記されているように、イエス様を信じていながら、罪の中を歩んでいるのにあたかも自分は神の前を正しく歩んでいるとしている者たちに対して、神様は大変厳しい懲らしめを与えられる。時には病を経験したり、肉体的な死を経験することもあると。アナニヤとサツピラがそうだったように、罪を犯した時に神はその場で彼らの命をお取りになった。

ですからパウロはここで「彼の肉が滅ぼされるため」と言います。彼の体が大変な苦しみを経験する、でも「それによって彼の霊が主の日に救われるためです」と書いてあります。「主の日」、すなわち神様のさばきがなされる時に彼が救われるためだと。ですから、罪ゆえに大変な苦痛をこの人は経験するけれども、この人が救いにあずかっている以上、この人の魂が永遠に滅ぼされることがないという話です。イエス様を信じて罪の赦しを神様からいただいたけれども、残念ながら私たちは地上にいて、罪から完全に解放されるわけではない。罪との戦いを経験しながら敗北を繰り返しています。時にはこのように罪の中を歩み続けるかもしれない。その時に神様は確かにいろいろな懲らしめをもたらすでしょう。でもその人の魂が救われているゆえに、その人が救いを失うことはないということです。でももしそういう人生を生きたとしたら、自分のしていることは価値のないことだ、自分はむだな人生を過ごしているとその人は気づいているでしょう。信仰者の皆さん、罪の中を歩み続けるということは何もいいことはないのです。それはすばらしいと、我々の罪がそのようにささやき続けるでしょう。でもそこには何の祝福もないということを私たちは気づかなければいけない。

C. 罪の恐ろしさ 6-8 節

パウロは教会として何をすべきなのかを話した後、罪の恐ろしさについてももう一度この教会の人たちに教えようとしています。

1. 「罪のもたらす影響力」 6 節

6 節に「あなたがたの高慢は、よくないことです。あなたがたは、ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのですか。」とあります。再びコリントの教会が抱えていた高慢の罪の問題点を指摘します。先ほども見てきたように、彼らはその罪に対して人間的な寛大さを示しました。パウロはそこに問題があると言うのです。あなたたちは罪の恐ろしさに気づかなければいけないと。その罪の恐ろしさを「パン種」という例えを用いてパウロは説明していきます。おわかりのように、「パン種」というのは既に発酵したパン生地的一片のことです。「パン種」というと、わずかな例外を除いていい意味では使いません。パークレーはこう言います。「ユダヤの文学においてパン種は悪い影響の代用として用いられている。ユダヤ人は発酵を腐敗と同一視したのです。そこでパン種は人を腐敗させる影響の代用となった。」と。イエス様はそういう意味でこの「パン種」ということばを使っておられます。

マタイ 16:11 でも「パリサイ人やサドカイ人たちのパン種に気をつけることです。」と言い、12 節でその説明をしてくださっています。「イエスが気をつけよと言われたのは、パン種のことではなくて、パリサイ人やサドカイ人たちの教えのことである」と。またルカ 12:1 でも「おびたしい数の群衆が集まって来て、互いに足を踏み合うほどになった。イエスはまず弟子たちに対して、話された。『パリサイ人のパン種に気をつけなさい。それは彼らの偽善のことです。』と記されています。イエス様は誤った教えや彼らの偽善に気をつけなさいと、「パン種」という例えを使って話したのです。つまり「パン種」の影響力、罪の影響力です。

「あなたがたは、ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのですか。」、知っているでしょう？と。罪も全く同じで、ほんの小さな罪が全体に影響を及ぼす。それは個人にも群れ全体にもです。

2. 「罪への指示」：「古いパン種を取り除きなさい」 7節 Iテサロニケ5：22

そこでこの7節にどうしたらいいのか、罪に対する指示が出ています。「新しい粉のかたまりのままいるために、古いパン種を取り除きなさい。」と。当時の人々はパンを焼く時に発酵したパン生地的一片を取って置いて、それを次にパンを焼く時に加えて発酵させたのです。パウロはそれをよく知っていました。

「新しい粉のかたまり」、つまり罪の赦しを得て聖められた信仰者たちの話です。彼らとその聖さを保ち続けるためには、「古いパン種」の影響を受けてはだめだと言うのです。だから「古いパン種を取り除きなさい」、つまりどのような悪であってもそれを完全に除去することを命じているのです。パン種が生地全体に影響を及ぼすように、悪も同様に全体に影響を及ぼす。だから悪を赦してはいけません。どんな小さな悪でもそれを除きなさい。それが命令だったのです。ちょうどパウロがIテサロニケ5：22で「悪はどんな悪でも避けなさい。」と言っています。クリスチャンの皆さん、我々はそれを心にしっかりと刻んでおかなければいけません。どんな小さな罪も赦してはいけません。その小さな罪があなたのさまざまな分野に影響を及ぼすからです。

3. 「罪からの勝利」 7-8節

1) 勝利を得ることが可能な理由 7節

罪に対して我々はどうするべきなのかを教えたパウロは、私たちがこの厄介な罪に対して勝利することができるのだということを7節後半から8節にかけて教えます。7節「あなたがたはパン種のないものだからです。私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。」と言います。我々クリスチャンというのは罪を完全に赦していただいた者たちだと繰り返すのです。そしてその上で「私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。」、これが我々が罪に対して勝利を得ることができる理由だとパウロは言います。

注目していただきたいのは「過越の小羊キリスト」と書かれていることです。「過越」というのはイスラエルの民がエジプトにいた時に、神は10の災いを下されました。その10番目の災いがそれぞれの家庭において人間であろうと家畜であろうと長子が殺されるということです。それから逃れるために、小羊を殺してその血を門柱とかもいに塗りなさいと。そうすれば天使が来てその血を見たらその家は過ぎ越され、その家の長子は殺されないで済むということです。この10番目の災いがある、その後イスラエルの民は神の示された約束の地へと出て行くのです。

パウロはここでその過越の羊と主イエス・キリストを対比するのです。「私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられた」と。つまりイエス様が既に十字架で私たちの罪の代価を完全に支払ってくださったと言うのです。ゆえにイエス様を信じるすべての罪人が永遠のさばきから、また絶対的な罪の束縛から完全な赦しを、解放をいただくことができるのだと。エジプトにいた時、人々が捧げた小羊は一時的な救いをもたらしたのです。しかもそれは肉体の死からの救いでした。しかし、イエス様は恒久的な永遠の救い、罪からの救いをお与えになることができる。あの時に殺した羊は一時的なものだったけれども、過越の小羊であるイエス様は永遠の救いを私たちにもたらすことができると。7節のところに「すでに」過越の小羊キリストが「ほふられたから」だと書いてあります。これは既になされた出来事だからです。パウロは、私たちが一時的にではなく永遠に完全に罪のさばきと罪の束縛から救ってくださるこの小羊は既にほふられたのだ、つまりこの救いは既に備えられていると言うのです。

2) 勝利を得る手段 8節

「ですから、私たちは、古いパン種を用いたり、悪意と不正のパン種を用いたりしないで」、まず最初に罪からの聖めの話をしています。そしてその後で「パン種のはいらぬ、純粹で眞實なパンで、祭りをしようではありませんか。」と続きます。私たちがもしこのすばらしい救いをいただいた者として主に感謝するのであれば、我々は罪から聖められ続けていくことが必要だということです。「古いパン種を用いたり、悪意と不正のパン種を用いたりしないで」、どんな小さな罪でも罪を持ったまま、主の恵みを祝うことはできないのです。なぜならどんな小さな罪でも神様はお喜びにならないからです。かえって罪からみずからを聖め、真心から神をあがめ、そして神に感謝を捧げるのです。そして最後に「祭りをしようではありませんか」と言います。非常におもしろいのは、今見たようにエジプトから出てきたイスラエルの民は年に1回だけ過越の祭りをお祝いしました。しかし我々クリスチャンは罪の奴隷から解放されたことを祝うことができる。しかもパウロは「祭りをしようではありませんか」と現在形で言います。つまり1年に1回ではない。半年に1回ではない。我々はこのすばらしい神様からの恵みをいつも祝い続けていくことができるのです。

ここでパウロは二つのことを言います。私たちがこのすばらしい神様の救いにあずかったゆえに、そ

の神様の恵みをいつも感謝し続けることであり、そして同時に私たちはこの罪から離れ続けていなければいけない。例えば私たちが神の前に立つのは日曜日だけですか？月曜日から土曜日はどうですか？日曜日の礼拝が終わった後、我々は神の前に立っていないのでしょうか？我々は神の臨在から逃れてどこにも行けないのです。どこにしようとあなたは神の前に立っているのです。常に神があなたを見ておられるのです。だから私たちはこの日曜日の限られた時間だけ聖くありましようではなくて、すべての時間に罪から離れることです。ですから私たち信仰者の生き方は罪の告白を継続することですよね。願わくば罪から完全に解放されて、罪を犯さない者になりたい。それは後に来ます。栄光の体をいただいたらそうなる。でもその時までには、私たちは地上において罪を犯して神が悲しまれることを行い続けていってしまう。だから私たちはその罪を神の前に告白しながら生きるのです。そうしながら自分のうちから罪を聖めていただいて、神が喜ばれる者としてこの神の後に従っていくのです。すばらしい恵みを覚えて我々ひとりひとりがこの神様のすばらしさをいつも感謝しながら、その恵みを喜びながら歩んでいくことが必要です。

D. 戒規の実践 9-13節

9-13節で、罪のさばきの実践についてパウロが教えてくれます。「私は前にあなたがたに送った手紙で、不品行な者たちと交際しないようにと書きました。」、お読みになってわかるように、パウロはこのコリントの教会に宛ててIコリントより前に手紙を書いて送っていたことが書かれています。パウロがエペソで宣教の働きをしていた時、コリント教会の現状を知らされます。恐らくパウロは第三次宣教旅行でエペソを訪問する前にコリントに手紙を送っているのです。9節が私たちに教えてくれるのは、Iコリントの手紙がコリントの教会にパウロが送った最初の手紙ではなかったということです。10節「それは、世の中の不品行な者、貪欲な者、略奪する者、偶像を礼拝する者と全然交際しないようにという意味ではありません。もしそうだとしたら、この世界から出て行かなければならないでしょう。」、つまり最初に送った手紙でパウロが伝えたかったメッセージをコリント教会はくみ取らなかったことが9-10節に記されています。最初の手紙に不品行な者たちと交際しないようにと書いていたのです。でも人々はそれを誤解したのです。ですからパウロはその正しい説明をここに加えるのです。

1. 「その対象」 9-11節

1) この世の罪人

9節の「交際しないように」というのは「仲間になる」とか、「親密である」とか、普通はこのことには特別な密接さが含まれています。パウロが教えたかったのは、この世の人々と親しくってはならないということではないということです。10節の「世の中の不品行な者」たちというのは性的なものにおいて不道徳な人たち、実際この「不品行な者」というのは、ここでは「売春婦たちを追いかける者」という意味があります。そういう生き方をしている人たちです。また「貪欲な者」たちは「欲深い者たち」、むやみにさまざまなものを欲しがらる者たちです。「略奪する者」というのは「盗人」です。「偶像を礼拝する者」とは神でないものを神として崇拝することです。創造主よりも大切なものを持っている。このリストを見た時に共通していることは、全部自分中心です。みんなそれぞれ自分の欲をどうやって満たすか、そのことしか考えていない。まさにそれは主を知らない人たちの特徴です。そこでパウロはもし私が言ったことが世の中にいるこういう人々と交わってはいけないということなら、我々はこの地上に住むことはできないでしょう。なぜならこういう人々が世の中にあふれているからです。

2) 教会の罪人 11節

そこでパウロが本当に教えたかったことは一体何かというと、「私が書いたことのほんとうの意味は、もし、兄弟と呼ばれる者で」、パウロが「不品行な者」たちと交際しないようにと書いた「不品行な者」たちというのは「兄弟と呼ばれる者で」、つまり自称クリスチャン、クリスチャンと言われている者たちということです。そう言っている人たちで同じようなリストが続きます。「不品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそしめる者」、つまり人をののしる者です。「酒に酔う者、略奪する者」、こういった人々との関係について二つのことを禁止しています。「略奪する者がいたなら、そのような者とはつきあってはいけない、いっしょに食事をしてはいけない、ということです。」と言っています。

(1) 「つきあってはいけない」

一つ目は「つきあってはいけない」と言うのです。この「つきあう」というのは9節に出てきた「交際」と同じことばが使われています。そういう人と親しい交わりを持つてはいけないということです。

(2) 「いっしょに食事をしてはいけない」

「いっしょに食事」をしてならない、この「食事」というのは特別な食事の話ではない。普通の食事です。

ここでクリスチャンと言われる人でこのような罪の中を歩み続けている人には本来ならば当然個人的にもその人に罪を悔い改めなさいと言い、悔い改めなければマタイ18章が教えるように複数の者たち

が行って悔い改めなさいと言う。それでも悔い改めないなら教会に言うのですが、これはそれでも悔い改めない場合、最終的な話です。その時はそういう人と「つきあってはいけない」し、「いっしょに食事をしてもいけない」と。つまり今までクリスチャン同士として楽しんできた交わりをそういう人と持ってはいけないとパウロは言うのです。

それは少し厳しくありませんか？それは愛がないんじゃないですか？と言う人がいるかもしれない。でも実はこれが愛なのです。なぜならその人のことを本当に愛していたら、その人の最善を望むでしょう？その人を愛していたら、その人が本当に神様からの祝福をいただいて歩んでもらいたいと願うでしょう？神の前に罪を犯すというのは、そのすべてを台なしにすることじゃないですか？だからそのような歩みをしている人がいるならば、見て見ぬ振りをするのではなくて、兄弟、姉妹、あなたのしていることは間違っているからそれを悔い改めなさいと言うことはその人にとって大切なことであり、そしてそれを神様は望んでおられるのです。神のみこころに従う時に喜びがあり、祝福があるのだったら、そのように生きなさいと私たちは勧めてあげるのです。でもその人たちはそれを聞こうとしない。だとしたら、今まで楽しんできた交わりから彼らを除きなさいと。自分たちがしていることが間違っていることに気づくためにです。

2. 「その重要さ」 12-13節

12-13節でこの戒規の重要性を「外部の人たちをさばくことは、私のすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。外部の人たちは、神がおさばきになります。その悪い人をあなたがたの中から除きなさい。」とパウロは教えています。

1) 外部の人

外部の人というのは教会に属していない、この世の人たちの話です。彼らのところに出て行って彼らをさばくことは私たちの責任でなく、神の責任です。最終的にすべての神に逆らう者たちが神の前に立つのです。このすばらしい救いを拒んだすべての人が神の前に立って罪のさばきを受けるのです。彼らをさばくのはあなたの責任ではない、教会の責任ではないと。

2) 内部の人

では教会の責任は何かというと、内部の人たちをさばくことです。教会に属している者たちです。教会の中にいる悪い人たちをあなたがたの中から除きなさい。そういう人を今まで楽しんできたその交わりから断ちなさいと神が教えるのです。それは人間的に言えば、厳し過ぎると言うかもしれない。でも私たちは神に従う個人であり、その個人が集まった群れです。私たちが喜ばせたいのは人ではないのです。神様を喜ばせたい。そのためには神のみことばに従わなければいけない。勘違いしてはならないのは、繰り返しますが、このような行為は本当の愛だということです。私たちが子どもたちを育てていく時に、子どもたちが悪いことをしたら放っておきます？愛するから直そうとするじゃないですか？同じことです。だから私たちはもしたれかが罪の中を歩んでいるならば、そして個人としても、複数で行っても、教会が行っても悔い改めないとするならば、だれだれさん、私はあなたのことを愛しています、でもあなたがしていることは罪であり、それを悔い改めて神の前に正しく歩みなさいと伝えることです。それでもその人がそれを聞こうとしないなら、今私たちが学んできたように、悲しいですが、その交わりからその人を追放しなさいと。

きょう我々が見てきたことをコリント教会はしていなかったのです。彼らはそういう人たちが教会の中にいながら、何とも思っていなかった。悲しむことがなかった。私たちは人がどう思うかを考える、人が悲しむかどうかを考える。でも我々が考えなければいけないのは神が悲しまれるかどうかです。私たちの責任は神に対するものです。そして、あなたや私が神に従う時に、私たちは神のみわざを期待できるのです。あなたは人を変えることもできない。自分を変えることもできない。そんな人があなたの知恵をもって最善をなしたとしても、そこにどんな力があるかです。神に働いていただくためには神のルールに従わなければいけない。私たちは神の言われていることをしなければいけない。

きょう私たちが見てきたところは、改めて私たちに私たちの主がどれほど罪を憎んでおられるのかを教えてくださいました。ですから我々はまず自分自身の心をいつも吟味することです。私たちは周りの人を見てあの人はどうなのか、そんなことをするのはいい。そしてあなたが教会の中で親しくしている兄弟姉妹が罪の中を歩んでいることに気づいたら、悔い改めて正しい歩みをしなさいと私たちは命じます。神が喜ばれる教会は、神が喜ばれる個人が集まっているところです。そんな人にあなたも私もますます変えられていくことです。その時に私たちの主が喜んでくださる。みことばは私たちに神のみこころを教えてくださいました。ここに人間的な思いを挟んではいけないのです。私たちの責任はこの方に対するものであることをしっかり覚えて、ひとりひとりが神の前を神の助けをいただきながら聖く歩み続けていきましょう。そして願わくば私たちの愛する兄弟姉妹たちが同じように歩んで何とか神様の栄光を現わすことを願いながら、助け合って、祈り合ってください。